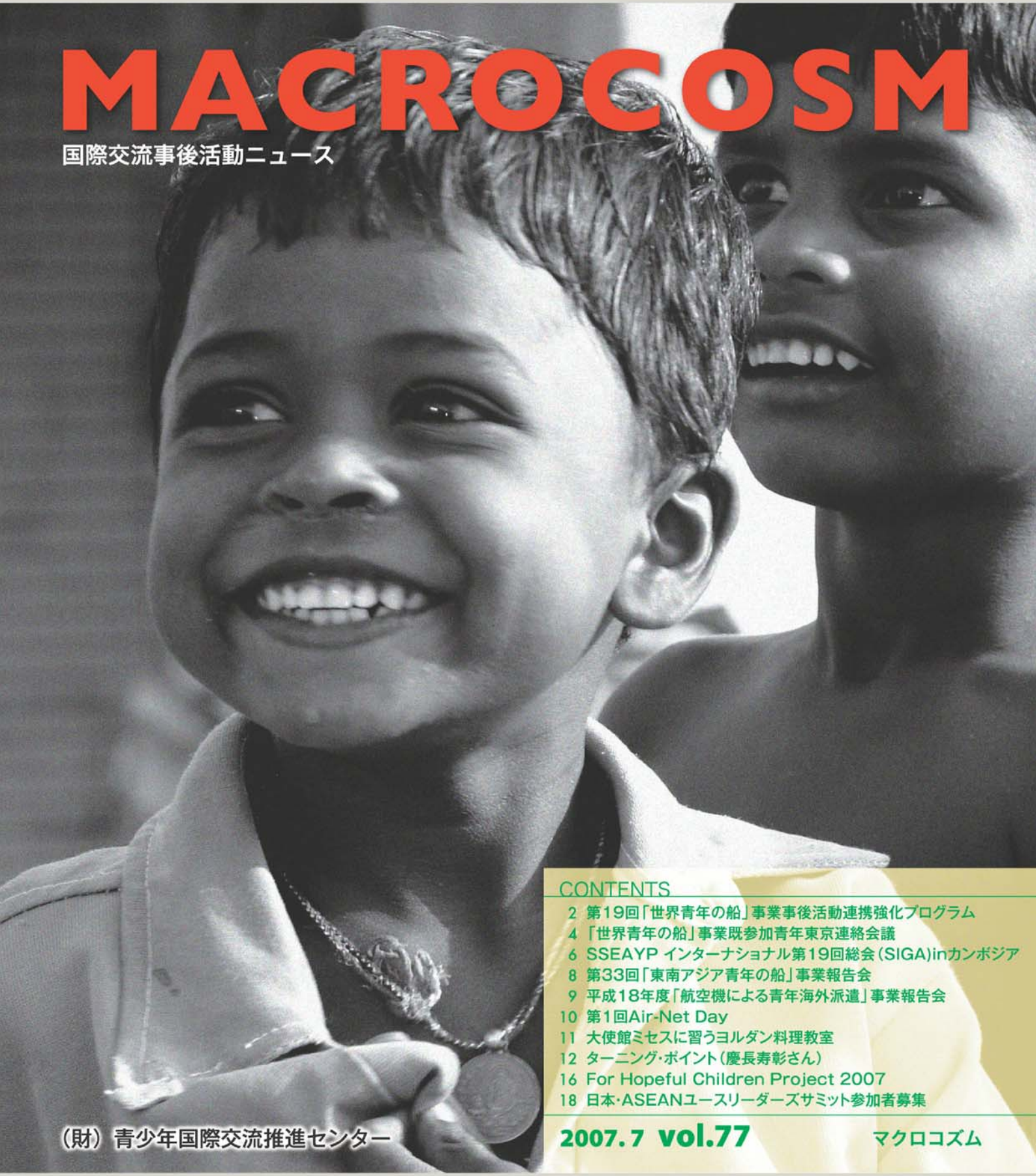
MACROCOSM

国際交流事後活動ニュース



CONTENTS

2 第19回「世界青年の船」事業事後活動連携強化プログラム
4 「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議
6 SSEAYP インターナショナル第19回総会（SIGA)inカンボジア
8 第33回「東南アジア青年の船」事業報告会
9 平成18年度「航空機による青年海外派遣」事業報告会
10 第1回Air-Net Day
11 大使館ミセスに習うヨルダン料理教室
12 ターニング・ポイント（慶長寿彰さん）
16 For Hopeful Children Project 2007
18 日本・ASEANユースリーダーズサミット参加者募集

（財）青少年国際交流推進センター

2007.7 vol.77 マクロコズム

第19回「世界青年の船」事業　事後活動連携強化プログラム

日本青年国際交流機構の代表3名が、ニュージーランドからバヌアツ間に乗船し、船上で参加青年に「世界青年の船」事後活動組織の説明を行い、各国での事後活動を紹介すると同時に、今後、青年がかかわっていくべき活動について話し合うセッション等を実施しました。

「世界青年の船」事業事後活動連携強化を目的として派遣された日本青年国際交流機構の代表者

代表者の話に熱心に耳をかたむける第19回「世界青年の船」事業参加青年

宮城青年国際交流機構副会長
第13回「世界青年の船」事業参加青年
伊勢　みゆき

6年ぶりに戻った船。今回、事後活動連携強化プログラムのスタッフとして再乗船する機会に恵まれた。私が担当したのは、主に第2回事後活動セッションでのワークショップ、第19回「世界青年の船」事業参加青年に向けてのメッセージボード作成、SWY Café(参加青年との意見交換会)に参加する青年たちの応対等であった。

ワークショップでは、各参加青年が、船上での自分の活動を振り返り、今後どのように事業参加の経験をいかしていきたいか、事後活動としてどんなことをしてみたいかを考える機会を設けた。乗船中に自分の活動について振り返り、事後活動について自分の考えをまとめ仲間と分かち合うことで、それぞれの事後活動への意識付けができたと感じている。更に4名の既参加青年代表者からそれぞれの具体的な体験談を聞くことで、参加青年はこれからの活動の幅を広げることができたと思う。

短い期間ではあったが、事後活動セッションやSWY Caféで参加青年に接し、本体事業の活動だけではなく、事後活動に対する参加青年の意識の高さに驚いた。コース・ディスカッションを中心としたプログラム内容の充実度、そして「青年の社会参加」という共通のテーマの下に事業が進められていることが、船を降りてからの活動の意識付けに大きく影響していると感じた。

私自身の宮城青年国際交流機構での事後活動体験談は、日本青年国際交流機構(IYEO)を理解してもらう上で日本参加青年だけでなく外国参加青年にとっても有用であったように思う。さらに、下船後、各自が所属することになる事後活動組織や都道府県IYEOのことなど、事後活動について具体的な質問や相談をしてくれる青年が思っていた以上に多かった。その一人一人と我々派遣者がじっくりと話をする時間を持てたことは貴重な体験であり、プログラムと事後活動をつなげる窓口としての私たちの立場がいかに重要かを実感できた。それと同時に、意識の高い青年たちが事後活動を行うにあたり、彼らの活動拠点となるそれぞれの各国事後活動組織(SWYAA)やIYEOの受入態勢を整える必要性があることもIYEOの活動に携わる一人として痛感した派遣であった。

最後に、このような機会を下さった関係者の方々、SWY19のメンバーとの出会いに感謝したい。

【日程表】

月 日	日 程
2月19日（月）	日本出発
2月20日（火）	ウェリントン（ニュージーランド）着 事後活動組織代表者との打合せ
2月21日（水）	第19回「世界青年の船」事業参加青年と学校訪問（寄港地活動） 第1回事後活動セッション準備、 ウェリントン出航（バヌアツへ）
2月22日（木）	第1回事後活動セッション実施
2月23日（金） 〜 24日（土）	船内事後活動推進プログラム 第2回事後活動セッション準備、 「世界青年の船」事業公式ビデオ用映像撮影
2月25日（日）	第2回事後活動セッション実施 バヌアツ寄港
2月26日（月）	バヌアツ出発
2月27日（火）	日本帰国

①事後活動セッション

2月22日　20:00-21:00	
20:00-20:20	アイスブレーキング 〜自己を振り返る〜
20:20-20:50	SWYAA概要説明
20:50-21:00	質疑応答
2月25日　9:30-12:15	
9:30-10:30	ワークショップ インタビューゲーム 〜あなたにとっての「世界青年の船」事業・事後活動を考える〜
10:30-11:00	既参加青年4名（指導官、ファシリテーター、IYEO派遣代表）の事後活動体験発表
11:00-11:05	セッション全体の質疑応答
11:15-12:15	国別ミーティング

②その他の主な船内事後活動推進プログラム

■ SWY Café（意見交換会）

毎晩公式プログラム後の時間を使って事後活動や下船後の活動に興味がある参加青年が集い、意見交換会を開いた。既参加青年代表で日ごとに何について話すのかあらかじめテーマを決め、参加青年がリラックスした雰囲気で彼らの関心事について相談できる場の提供を心がけた。

■ Future Post Project

1年後の自分や友達、知り合い宛に手紙を書くプロジェクト。現在の船の心境や今後自分がどのように変化していくのかなどを予測し、手紙に綴り投函することによって、自分の今後の方向性を考えるきっかけとした。事業参加者間のネットワーク構築においても有用なプロジェクトである。

■ SWYAA Bulletin Board

各国事後活動組織からのレポート、SWY19東京プログラムの報告(写真などを使って模造紙にデコレーション)、過去の東京連絡会議の報告、21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい事業の報告、各国事後活動組織が実施している社会貢献活動やプロジェクトに関連する資料を展示した。

■ 各国回生代表との打合せ

国別ミーティングで決定した各国の回生代表を集めて顔合せと打合せを行った。国と国、地域の連携を意識する場となった。

事後活動セッションで既参加青年を代表して
これから実施していく活動について説明するIYEO代表

「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議

「世界青年の船」事業既参加青年東京連絡会議（以下、既参加青年会議）は、平成19年4月17日から22日までの日程で開催されました。参加国は、ブラジル、カナダ、チリ、コスタリカ、フィジー、ニュージーランド、ソロモン諸島、トンガ、アメリカ合衆国、ベネズエラ、そして日本の11か国で、日本からは会議代表者を含む実行委員8名と事務局スタッフが参加しました。

＜主要な活動と成果＞

カントリー・レポート（各国活動報告）

各国の顕著な活動報告として以下が挙げられる。

- 15歳から17歳の生徒を対象として、国際関係と平和の文化を教えるプロジェクトを実施。また、「世界青年の船」事業の経験を基にした写真展も開催した。（ブラジル）
- 第19回「世界青年の船」事業の広報活動、参加青年の選考、事前研修に積極的にかかわった。社会貢献活動をしている会員が多い。（カナダ）
- 貧しい人々に芸術鑑賞のノウハウを伝える研修プログラムを企画した。（チリ）
- 環境ボランティア活動、国や地域の発展のために青年に将来の夢や希望を抱かせる活動、本や文具を子供たちに寄付する等の社会貢献活動に力を入れている。（コスタリカ）
- 第19回「世界青年の船」事業の訪問国活動と公式のインターナショナル・リユニオンの企画・運営の準備（航路変更に伴いキャンセル）。障害者施設の清掃活動やラウトカ病院小児病棟の設備充実に向けての活動を行っている。（フィジー）
- 第19回「世界青年の船」事業訪問国活動の企画・運営。広報活動、組織の連携作り、人材育成に力を入れている。（ニュージーランド）
- 組織の規約が完成し、政府からの認定を受けた。ホームステイ先のアレンジや日本語教室の支援。（ソロモン諸島）
- 村や教会の青年グループの青年育成活動に貢献。（トンガ）
- 会員間の連携を深めるために“シークレット・サンタ（ギフト交換）”プロジェクトの実施。ホームページの更新等広報活動にも力を入れている。（アメリカ合衆国）
- 「日本の文化週間」で書道を教えるワークショップを実施。知的障害児を支援する会と共同で折り紙教室を実施。（ベネズエラ）

＜事後活動組織の各国日本大使館・日本の関係組織との連携＞

ほとんどの事後活動組織が、日本大使館や現地にある日本の関係組織との連携を深めるための努力をし、良い関係を構築している。

大使館から大使館主催のイベントへの協力依頼があったり、大使主催の夕食会などの公式レセプションの場に招待される等、密接な関係を築いている事後活動組織も数多くみられた。

＜事後活動組織の各国政府との連携＞

ほとんどの事後活動組織が各国政府と連携を取りながら「世界青年の船」事後活動組織の発展のために活動を続けている。

事業広報、参加青年の選考、事前研修、報告会まで全てを任されている事後活動組織もあれば、部分的な支援を求められている事後活動もあるといったように、各々かかわりの度合に違いはあるが、どの事後活動組織でも、各国政府とのより良い関係作りを構築するための工夫と努力をしている。

＜事後活動組織の社会貢献活動＞

「世界青年の船」事後活動組織では、世界に広がるネットワークを活用したプロジェクトを立案し、社会に貢献する活動を目指す組織の数が年々増えてきている。会議では、今後取り組みたい活動内容について、日本人の実行委員も交えて話合いをした結果、大きく分けて二つのプロジェクトについて継続的に取り組んでいくことで同意した。

また、今年度から「Contribution of SWY Alumni to the Society（事後活動組織会員の社会への貢献）」というSWYAAにおける活動の大テーマを設定し、このテーマの下に次年度以降も活動を実行していくことや、目標達成のために組織間で協力していくことを約束した。

次ページにプロジェクト名を記します。詳細については、ホームページを御覧ください。
http://www.swyaa.org/conference/2007/2007_Index_J.htm

会議（日本青年国際交流機構（IYEO）にて）

フェアウェル・ランチ出席者

「世界青年の船」記念日 (International SWY Day)プロジェクト

「世界青年の船」事後活動組織では、第1回「世界青年の船」が出航した1989年1月18日を記念し、毎年1月18日を「世界青年の船」記念日と定め、この日に世界各国で社会貢献活動を実施していくことが約束された。

- スクール・キャラバン・プロジェクト
- 環境を意識する日
- チャリティー・ランチ(社会貢献活動のための資金集め)

SWY20周年記念プロジェクト

- 「世界青年の船」カレンダー 2008
- 「Thank You Book」更新版の作成
- 第20回「世界青年の船」事業参加青年へのメッセージ作成
- 「世界青年の船」事業の歴史

プロジェクト毎の話合い

「世界青年の船」事業　既参加青年東京連絡会議日程

月 日	時 間	日 程
4月17日(火)	18:00-19:00 19:30-21:00	会議代表者、日本参集 実行委員会 会議代表者と実行委員の夕食会／オリエンテーション
4月18日(水)	10:00-12:30 14:00-17:30 18:30-20:30	内閣府訪問 - 内閣府担当者との懇談 (カントリー・レポート発表) 【会議①】 社会貢献活動への取組の促進とネットワークの充実強化について - 社会貢献活動への取組の現状報告と今後の活動促進 歓迎会
4月19日(木)	10:00-13:00 14:30-18:00	【会議②】 社会貢献活動への取組の促進とネットワークの充実強化について - 現地日本大使館など日本関係者との連携について - 自国の政府との連携 【会議③】 社会貢献活動への取組の促進とネットワークの充実強化について - グローバルネットワークをいかした事後活動の展開について
4月20日(金)	10:00-13:00 14:30-18:00	【会議④】 社会貢献活動への取組の促進とネットワークの充実強化について - グローバルネットワークをいかした事後活動の展開について 【会議⑤】 「世界青年の船」、「世界青年の船」事後活動組織の広報活動について SWYAA International Reunion の今後の方向性について
4月21日(土)	10:00-13:00 13:45-15:30	【会議⑥】 会議のまとめ、議事録の確認 フェアウェル・ランチ　会議報告
4月22日(日)		会議代表者　帰国

オセアニア地域での連携について話し合うソロモン諸島とフィジーの代表

既参加青年会議報告(ブラジルの事後活動組織代表者の発表)

SSEAYPインターナショナル第19回総会（SIGA）in カンボジア

The 19th SSEAYP International General Assembly in Cambodia

「東南アジア青年の船」事業アセアン各国事後活動組織と、日本青年国際交流機構（IYEO）で組織しているSSEAYPインターナショナルの第19回総会（SIGA）が、4月28日～5月1日に、初めてカンボジア・シェムリアップで開催されました。

カンボジアは、「東南アジア青年の船」事業に2000年から正式参加をしており、2004年に事後活動組織SSEAYPインターナショナル・カンボジアが設立されました。

"SSEAYP for Cooperation and Development" をテーマに掲げた今回のSIGAは、アセアン全10か国と日本からの230名以上の参加者を得て、カンボジアの50名以上の若い実行委員メンバーの運営のもと、成功裏に終了しました。

来年の第20回を迎えるSIGAは、フィリピン・セブ島での開催が予定されています。多数のIYEO会員の参加をお待ちしています。

日付	内容
4/28（土）	参加者到着、夕食
4/29（日）	開会式、総会、SSEAYPインターナショナル賞表彰式、ワークショップ、歓迎夕食会
4/30（月）	アンコール遺跡見学、シェムリアップ市内見学、歓送夕食会
5/1（火）	参加者帰国

◀ギフト交換をする谷本龍哉内閣府大臣政務官及びH.E. Im Sethy教育青年スポーツ省Secretary of State

各国からのSIGA参加者▶

◀SIGAに参加した各国事後活動組織の代表者

アンコール・ワットを訪問する日本からの参加者▶

SSEAYPインターナショナル賞

SIGAでは原則的に3年に一度、各国事後活動組織及びSSEAYPインターナショナルに貢献のあった人を顕彰する「SSEAYPインターナショナル賞」の表彰が行われています。今回のSIGAでも「SSEAYPインターナショナル賞」の表彰が行われ、IYEOからは、寺下英明IYEO顧問が、長年にわたるIYEO並びに「東南アジア青年の船」事業への功績を称えられ表彰されました。

寺下顧問は、第2回「東南アジア青年の船」事業（昭和50年度）ナショナル・リーダーを務められた他、数多くの青年国際交流事業に団員及び団長として参加されました。1985～1986年には初代IYEO会長を務められ、更に、第32回「東南アジア青年の船」事業（平成17年度）にアドバイザーとして再乗船し、ディスカッション活動の基調講演を行いました。また、寺下顧問の貢献は青年国際交流事業のみにとどまらず、1980～1984年には総理府青少年問題審議会委員としても活躍されました。

SSEAYPインターナショナル賞を受賞する寺下英明IYEO顧問

SIGA 2007 in Cambodia
～カンボジアの実行委員とともに

平成18年度「国際青年育成交流」事業
（カンボジア）参加青年
平山　雄大

昨年9月、「国際青年育成交流」事業でカンボジアに派遣された際、SSEAYPインターナショナル・カンボジア（SIC）の皆には、ワークショップやホームステイをはじめとした各プログラムで大変お世話になり、お互いの友情を育むことができた。帰国後も、手紙やメールのやり取りはもちろんのこと、「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業や「東南アジア青年の船」事業の課題別視察などにかかわる中で、カンボジア青年との距離はますます短くなっていった。このような経緯から、今回のSIGAには、4月23日から5月10日までカンボジアに滞在し、準備や運営の手伝いをさせていただきながら参加した。

4月25日に首都のプノンペンから開催地であるシェムリアップへ荷物や必要機材を運び終わった後は、事務所の設営、参加者に配布する名札・書類の作成等を手伝った。徐々に各国から参加者が到着する中、開催前日には実行委員会のメンバー全員でお寺にお参りに行き、SIGAの成功を祈願した。皆の熱心な祈りから、SIGAに対する真摯な想いが伝わってくるようだった。また、開催期間中は毎夜午前2時～3時、ときにはそれ以降まで実行委員ミーティングが行われ、細部に至るまで最終的な確認がなされた。共にミーティングに参加する中で、華やかなSIGAの舞台も、このような、実行委員の裏での猛烈な苦労と頑張りのうえに成り立っていることを痛感した。

カンボジアの実行委員とともに
（筆者後列最左）

その甲斐あって、SIGAは大成功のうちに幕を閉じた。気配りの行き届いた運営は好評で、1日目のウェルカムディナーから最終日前夜のフェアウェルパーティにいたるまで、総勢236名に及ぶ各国からの参加者は（自分も含め）、充実するとともにやさしく心地良い時間を過ごすことができたように思う。私は「国際青年育成交流」事業の既参加青年であるため、今まで「東南アジア青年の船」事業と直接的なかかわりは持っていなかったが、今回のSIGAを通して、カンボジアを越えて東南アジアの新しい友人を数多く作ることができ、同時に事業を越えた結びつきも感じることができた。このような面も、SIGAの醍醐味のひとつではないだろうか。

フェアウェルディナー後のミーティング兼打ち上げでの、実行委員の皆の晴れやかな笑顔は忘れられない。その日は結局朝まで語り合い、そして歌い合い、本当に楽しく貴重な時間を過ごした（ホテル側はいい迷惑だっただろうけれども）。

「実行委員の一員として、私たちと一緒に頑張ってくれてありがとう！」帰国日、夜遅かったにもかかわらず10人以上のSICメンバーがプノンペンの国際空港に駆けつけてくれた。たいした働きはできず、むしろ迷惑をかけた部分も多かったが、このように言ってもらえてうれしかったし、「国際青年育成交流」事業のその後として、より一層、カンボジア青年との繋がりが深いものになった。

社会貢献活動

今回、SIGAの開催にあわせた4月27～28日、カンボジア・シェムリアップ州にて、シンガポールと日本の既参加青年が社会貢献活動に取り組みました。これは、「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業の事後活動として実施されたもので、孤児院での文化活動や図書の寄付、地元の子どもたちのラーニング・センターでの図書室の整備などを行いました。詳しくは次号のマクロコスムでご紹介します。

第33回「東南アジア青年の船」事業報告会

3月18日に開催された第33回「東南アジア青年の船」事業報告会には、150名を超える方々にご来場いただき、また、日本参加青年全員が集結し、大成功の報告会となりました。

第33回「東南アジア青年の船」事業報告会副実行委員長
宮地　由紀子

「『東南アジア青年の船』事業（SSEAYP）でのすばらしい経験を自分の中だけに留めておいてよいのだろうか。この経験を今後どのようにいかしていけばよいのだろうか」　多くの経験、出会い、思い出を与えてくれたSSEAYPがまるで夢の中の出来事だったかのように、次第に日常生活へ溶け込んでいく自分に問いかけた。

大学生活に戻り、ゼミでSSEAYPでの経験をプレゼンしてほしいと教授から頼まれた。SSEAYPの目的、ASEAN青年300名との船上での共同生活、寄港地でのホームステイ、クラブ活動、ディスカッションなど全力で駆け抜けた52日間での経験を30分という時間にまとめた。プレゼンを終え、最後にゼミ生からたくさんの質問を受けた。海外から見た日本とは。事業に参加して変わった点は何か。どのように応募するのか。など様々な質問を受け、しっかりプレゼンを聞いてくれていたこと、また私の経験が何か伝わったことに嬉しさを覚え、「自分の経験を伝えていくこと」が今の私にできることだと確信した。

昨年12月に事業が終了してまもなく、私たちは報告会へ向けて準備を進めてきた。52日間のASEAN青年との交流を通して経験したこと、感じたこと、学んだことを報告会で一人でも多くの人に伝えたい。報告会をひとつのきっかけとして、何かを感じ取ってほしいという思いのもと、「伝えたい時間（トキ）がある～ASEAN青年との、出会い・友情・未来への絆～」というテーマを掲げた。ゼミでの経験を通して、私は同じ時を過ごした38名の日本参加青年（JPY）と一緒に経験を伝えたいと思い、全体把握できる副実行委員長として全国各地にいるJPYと連絡を密に取ること、また、役割分担をきちんと行い全員で作りあげる報告会を目指した。

アンケートで満点をいただいた
パネルディスカッション

第33回日本参加青年作詞作曲のテーマソング「翔」

報告会の話し合いを進めていく中で学んだこと。それは、なぜ伝えたいのかを考えること。経験したことはたくさんある。しかしすべてを伝えることはできない。話し合いではあれもこれもプログラムに盛り込もうとしている私たちがいた。プログラムを決める・広報ポスターに載せるコンテンツを決める・展示コーナーの内容を決める・パネルディスカッションの台本を作るなどの準備を進めていく中で、プログラムのひとつひとつについて「なぜ報告会で披露したいのか？なぜ伝えたいのか？」と考えていくことで、時間に追われ経験したことを整理する時間のない多忙な船の生活でのプログラムひとつひとつの意義や学んだことを整理することに繋がった。このようにひとつひとつ考えることで伝えたい内容がきちんと伝わるものになったと感じた。

報告会は3時間という限られた時間で、どこまで伝わるかわからなかった。しかし、38名が各自の担当を通して伝えようとしたこと、パネルディスカッションで参加青年が自分の経験を一生懸命伝える姿、展示ブースでの参加青年との触れ合い、歌っている参加青年の表情など私たちの伝える姿勢から想いが会場に伝わったことがアンケートからわかった。

この報告会は今後の私たちの活動にきっかけを与えてくれたように感じる。「Once a PY, Forever a PY」　この想いを忘れずにこれからも事業を支えていきたいと思う。まずは第34回「東南アジア青年の船」事業のサポートから…

未筆ながら、第33回「東南アジア青年の船」事業報告会を支えて下さった内閣府、（財）青少年国際交流推進センター、管理部スタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

平成18年度「航空機による青年海外派遣」事業報告会

平成19年2月18日（日）、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、平成18年度内閣府青年国際交流事業（航空機による青年海外派遣）報告会が行われました。「伝える和、広がる輪」というテーマのもと、一般来場者と今年度参加青年あわせて約250名が来場し、参加青年はパネルディスカッションやブース展示等で自分たちの派遣活動を報告しました。

<プログラム>

時間	内容
13：30	開会式
13：40	内閣府青年国際交流事業概要説明
13：55	参加青年による事業報告（パネルディスカッション）
14：50	平成19年度事業募集について
15：35	ブース展示 （各派遣団ブース、懇談ブース、写真ブース等）
16：45	閉会式（IYEO田中南欧子会長総評）

◀パネルディスカッションでは「訪問国活動内容」「和と輪」「帰国後とこれから」というテーマで発表した

▲一般来場者と交流するカンボジア派遣団

写真を使って来場者に説明する韓国派遣団▶

◀写真ブースでは、訪問国活動中に撮った写真でフォトコンテストを行った

▲閉会式では"It's a small world"をそれぞれの訪問国の言語で歌った

報告会に集った▶
今年度参加青年

第1回 Air-Net Day

4月21日(土) 国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、第1回「Air-Net Day」を開催しました。約40名の「航空機による青年海外派遣」事業のOB・OGが参加し、和やかな雰囲気の中、積極的な意見交換が行われました。

■「Air-Net Day」開催の目的

①3月に実施された「事後活動充実強化のための事後活動組織代表者等の派遣」の代表者より、派遣の成果を日本既参加青年に広く伝える。
②派遣年次を超えた日本既参加青年の間のコミュニケーションを図り、ネットワークを築く。
③内閣府に招へいされた外国既参加青年との国際的ネットワークを作る方策について検討する。
④日本と訪問国との友好関係を促進する活動を検討する。
⑤「航空機による青年海外派遣」事業参加者間のコミュニケーションを図る。

■ プログラム

	時間	内容
第1部	13:30〜14:00	開会式
	14:00〜15:00	報告会 本年2月〜3月に、内閣府よりIYEO代表者がドミニカ共和国、ヨルダン、韓国、中国に派遣され、訪問国政府及び既参加青年との今後の活動について協議を行った。現地での意見交換等の報告及び成果、今後の活動の展望について発表した。 ①ドミニカ共和国 金子隆司団長 (H17ドミニカ共和国派遣団団長) 堀大介 (H10ドミニカ共和国派遣団団員) ②ヨルダン 藤本和子 日本青年国際交流機構広報担当幹事 (H6ヨルダン派遣団団員、H9ヨルダン派遣団副団長) 立原公美子(H17ヨルダン派遣団副団長) ③韓国 川嶋伸明 日本青年国際交流機構運営委員 (H14、H17「日本・韓国青年親善交流」事業渉外団員) 山崎庸貴 日韓交流連絡会議事務局長 (H14「日本・韓国青年親善交流」事業団員) ④中国 赤澤美雪 日本青年国際交流機構元事務局次長 壬生佐智子 日本青年国際交流機構運営委員 (H16「日本・中国青年親善交流」事業渉外団員) ⑤「Air-Net Day」を考える会(分科会)の説明 ＊年に一度「Air-Net Day」を実施すると仮定して具体的なプログラム案を考える。 國分由佳(H5コスタリカ派遣団団員、H10デンマーク派遣団副団長)
	15:20〜16:20	分科会 A) ドミニカ共和国派遣団OBの会 B) ヨルダン派遣団OBの会 C) 韓国派遣団OBの会 D) 「Air-Net Day」を考える会
	16:25〜16:55	発表会
	16:55〜17:00	閉会の挨拶
第2部	17:30〜19:00	懇親会

発表を熱心に聴く参加者

ドミニカ共和国派遣団OBによる発表

参加者の声

末岡聖史(平成13年度韓国派遣団 団員)

自分の派遣国以外の国外の事後活動を知る機会は、これまであまりなかったと思います。今回、Air-Net Dayに参加し、4か国の活動を聞くことができ新鮮でした。ネットワークづくりへの取組を具体的に考える有意義なイベントとなったのではないでしょうか。

私が韓国へ派遣された当時は、歴史問題等で日韓交流イベントの中止が相次ぐ等、難しい時期でした。そんなときに、こういったネットワークがいきてくるのではと思います。お互いの国の事情もあり、仕方ないことではありますが、友人に事業を紹介したらその国への派遣事業がなくなった、せっかくの青年海外派遣事業なのに帰国後の交流がない、違う世代の人とも交流したい…。それでは、このネットワークの仲間で交流活動を作ってしまおう! このAir-Net Dayで、そういう活動の報告が聞ける日もそう遠くないような気がします。

Air-Net Day URL http://www.iyeo.or.jp/Air/airnetday/

懇親会に集まった参加者

日本青年国際交流機構(IYEO)主催

こんなマクルーバができあがりました

photo: Miyuki Akazawa

大使館ミセスに習う ヨルダン料理教室

メニュー

- マクルーバ
- ヨーグルトサラダ
- ミントティー

いつもの食材でパパッとヨルダン料理ができる！

平成19年5月12日（土）、日本橋社会教育会館7階料理教室（東京都中央区）にて、ヨルダン大使館参事官夫人のシーファ・ハダットさんを講師にお迎えし、ヨルダン料理教室が開催されました。ヨルダンについて知ってもらう機会を作ろうとヨルダン派遣団OBが中心に企画運営し、28名の参加者がありました。当日は「マクルーバ」という炊きこみご飯を炊飯器で作る方法を教えていただきました。

ご飯が炊きあがるまでの時間を利用して、シーファさんの日本への思い、ヨルダンにも日本と似た習慣があること、生活文化、家族、平和への思いなどのお話を伺い、ヨルダンへの理解を深める楽しいひと時となりました。

マクルーバ

「マクルーバ」とはアラビア語で「上下逆さまにした」という意味。バターで炒めたマトンかチキン、スライスしたタマネギとナス、サフランライスを層にして重ね、なべ（炊飯器）で炊き上げる。なべを上下逆さにひっくり返して大きなお皿に移し、仕上げに松の実をちらす。

■材料

米	2カップ(よく洗っておく)
バター	大さじ4 (大さじ2→チキンとタマネギを炒める) (大さじ2と以下のオリーブオイル大さじ2で好みの野菜を炒める)
オリーブオイル	大さじ2
サラダオイル	1/2カップ程度
タマネギ	2カップ(さいの目に切っておく)
チキン	100～200g (1.5センチくらいに切っておく)
ナス	大1個または小2個を皮をむかずにスライスしておく
松の実	1/2カップ
クミン	大さじ1.5
オールスパイス	大さじ3/4
ガーリック	4片(砕いておく)
サフラン	ひとつまみ
塩こしょう	少々

♥好みで以下の材料を加える

カリフラワー	1/4を細かく刻んでおく
にんじん	中サイズ1/2をスライスする
じゃがいも	1個をスライスする

■作り方

1. 米を洗ってつけておく。
2. チキンに塩こしょう少々をまぶしておく。……①
3. よく熱したなべに大さじ2のバターを入れ、タマネギが透明になるまで炒める。
4. 炒めたタマネギに①を加える。チキンにまんべんなく焦げ目がつき、タマネギがきれいに色づくまで炒める。
5. クミンとオールスパイスを加え、チキンが隠れるくらいの分量の水を注ぐ。強火にかけ、沸騰したらふたをしないで20分間弱火で煮る。……②
6. ②からチキンを取り出し、残りのスープを別のボールに取り分け、サフランひとつまみを入れて溶かす。
7. なべの中にサラダオイルを入れ、スライスしたナスを揚げる。きれいに色づいたら、引き上げてペーパーの上で油を切る。
8. 好みで他の野菜を加える場合は、ここで炒めておく。
9. 炊飯器の中に塩、砕いたガーリックを入れ、チキンとタマネギを加える。ナスのスライス(プラスその他の野菜)と米を入れ、また別の野菜と米を層にして入れていく。各層に好みのスパイス(白こしょうやカルダモン)を加える。米が隠れる程度に②のスープを上から注ぐ。炊飯器のスイッチを入れる。
10. ご飯を炊いている間に、なべに大さじ2のバターを溶かし、松の実を炒める。……③
11. ご飯が炊きあがったら大皿を炊飯器の釜の上にかぶせ、釜をすばやくひっくり返して中身を出す。③の松の実をちらす。

講師のシーファさんが味付けを確認して回る

参加者の声

- 先生がとてもすてきでした。ヨルダンに行ってみたくなりました。
- 食べたこともないヨルダン料理が簡単に作れてびっくり！
- 料理もよかったが、ヨルダンの話が聞けて有益でした。

ヨルダン国旗をデザインしたヨルダン派遣団OBお手製の紙コップ

「人生を変えたターニング・ポイント」

世界銀行 シニア都市環境スペシャリスト
第18回「東南アジア青年の船」事業参加青年
慶長（けいちょう） 寿彰（としあき）さん

世界銀行で途上国の地方自治体の育成や都市環境対策を支援しておられる慶長寿彰さんにお話を伺いました。慶長さんは長らくワシントンDCの世界銀行本部にて勤務しておられましたが、この度、スリランカに転勤されることになり、新しい勤務先に赴任する途中で日本に立ち寄って、今日の取材のために時間を割いてくださいました。

慶長さんは地方公務員として青森県八戸市役所に勤務しておられましたが、第18回「東南アジア青年の船」事業（1991年）に参加されたことがきっかけとなって、国際公務員への転身を決意されました。国際的な舞台で活躍されるまでの経緯や、業務を巡るさまざまな出来事について語っていただきました。

初めての海外だったインドネシアがたいそう気に入って、帰国したくないとさえ思われたそうですね。

大学院の１年だった1986年、指導教官の勧めもあって、インドネシアのジャカルタで行われていたJICA（国際協力機構）の都市環境調査プロジェクトに参加する機会がありました。ジャカルタに1か月ほど滞在して、プロジェクトのお手伝いをすることになったのです。当時、僕は途上国にさほど興味があるわけでもなく、*南北問題に代表される地球規模の問題に特別な関心を持つこともありませんでした。学生時代は東京六大学で野球をしていて、野球一筋の硬派な生活を送っていましたから、少しくらい「普通の学生らしい生活」をしたいと思って大学院に進学したんですよ。まあ、途上国に特段の興味はありませんでしたが、ただで海外に行けるということで、とりあえずジャカルタに行くことにしたのです。

実際に行ってみると、インドネシアには、人生の転機になるような経験が待っていました。経済社会調査を行う現地のボランティア学生たちを統率する、そんな役回りが本当に楽しかったのと同時に、途上国における貧富の格差に大変なショックを受けたのです。ジャカルタは高層ビルが建ち並ぶ大都会ですが、１つ裏手の道に入ると、劣悪な住環境のスラム街で生活する大勢の人たちもいました。そんな貧富の差を目の当たりにし、このとき初めて、「いつかきっと、途上国の人たちのためになるような仕事をしたい」と強く思ったのです。ジャカルタでの夢のようなひと月はアッという間に過ぎ、初めて訪れたインドネシアが大好きになって、その後、何度も訪問することになります。

第18回「東南アジア青年の船」事業（1991年）に参加されたきっかけは何でしたか。

青森県八戸市の市役所に勤務していたころ、内閣府（当時の総務庁）の「東南アジア青年の船」事業参加青年募集のポスターを市役所内で見かけました。秋篠宮紀子さまが参加された国際交流事業だということもあって有名でしたから、事業のことは知っていました。大学院生時代にインドネシアで援助プロジェクトにかかわったことで、東南アジアに対して強い関心を持つようになっていましたので、すぐに応募しました。

最終試験では、総務庁で面接がありました。面接時には、「地方における事後活動の難しさ」を面接官に指摘されましたが、「地方にこそ、そういう活動が必要だ」と熱弁して合格を勝ち取りました。そういうわけで、28歳の時に「にっぽん丸」に乗り込むことになったのです。

何よりも印象的だったこと

「東南アジア青年の船」のプログラムは本当に楽しかったですね。できれば、もう一度参加したいくらいです。この事業に参加する前に何度か東南アジアに行ったことがありましたから、訪問先で体験したことに驚くとか、ショックを受けるということはありませんでした。

何よりも印象的だったのは、プログラムそのものより、一緒に参加した仲間のことです。特に、国立オリンピック記念青少年総合センターで行われ

*北半球に偏在する先進諸国と南半球に偏在する発展途上国との間の経済格差に基づく政治的、経済的諸問題。

た事前研修にはびっくりしました。なんでこんな「でしゃばり」ばかりが来ているんだろう、すごい連中が参加しているんだなと思ったものです。研修中にはいろいろなことを議論して決めました。今でも覚えているのは、各寄港地で、参加青年は国旗を振りながら下船するのですが、「日の丸を振りたくない」という人がいたことです。なぜ振りたくないのかということから始まって、徹底的に話し合い、最終的には、各個人の決定に任せるということになりました。日の丸を持ちたくない人は何を持つのかという話になり、小さな鯉のぼりを使うことになりました。結局、僕も鯉のぼりを振って下船しました。

このように、「東南アジア青年の船」事業では、訪問先よりも参加者のことが強く印象に残っています。各国の参加青年にしても、シンガポールの青年やフィリピンの青年にはリーダーシップを取る人が多かったり等、いろんな特徴がありましたね。

地方公務員を辞める

「東南アジア青年の船」事業に参加して、初めてインドネシアに行ったときの熱い記憶が蘇ってきました。アジアの熱い風、都市の混沌とした活気、貧しくても心豊かな人々、瞳輝く子供たち……。大学院時代にジャカルタで感じた「途上国のために」というそんな思いが、日に日に強くなっていったのです。「東南アジア青年の船」事業から帰国して、八戸で市役所の業務に戻ったのですが、仕事が手につかなくなってしまいました。地方行政という仕事は面白く、好きでしたが、もう一度、あのジャカルタで湧き上がってきた「途上国にかかわる仕事をしたい」という目標を本気で目指してみようという決意をしたのです。「東南アジア青年の船」事業に参加して約1年後、国際機関を目指すため、市役所を辞めることにしました。安定している公務員を辞めるなんてもったいないという人もいましたが、大半の人は理解を示してくれました。あの選択は、大きなターニングポイントだったと思います。

国際機関の試験を受ける

アジア開発銀行、世界銀行、国連のJPO (Junior Professional Officer)に応募しました。JPOとは、日本の外務省が毎年行っている国際機関への派遣制度です。日本政府が給与等の経費を負担して、将来正規の国際公務員を志望する若手邦人を一定期間国際機関に派遣し、国際機関勤務を通して専門知識を深め、国際的経験を積ませる制度です。この選考試験に合格すると、原則2年間の任期で派遣取決めを結んでいる国際機関に職員として派遣されます。

とりあえず、JPOには絶対合格したいと思っていましたので、予定通り合格できてよかったのですが、外務省から最初に提示されたのは、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のリベリア難民住環境整備担当官のポジションでした。UNHCRでリベリアか…と、かなり迷いました。それまでは自分の専門を考慮して、UNDP（国連開発計画）かUN-HABITAT（国連人間居住計画）、あるいはUNEP（国連環境計画）を希望していたからです。JPOは任期が2年で、その後の保障がありませんから、JPOの任期終了後も国際機関での勤務を希望するのなら、正規職員になる可能性の高いUNHCRで経験を積んだ方がよいと外務省が強く勧めるのです。リベリアかあ…どうしようかなあ…とオファーを受けるかどうか決めかねているうちに、世界銀行に合格したという連絡が入りました。JPOの任期は2年ですが、世界銀行では正規職員として採用され、勤務地はワシントンDCです。リベリアとワシントンDC、これは究極の選択ですね。いろいろ考え、最終的には世界銀行を選びました。これも人生の大きなターニングポイントでしたね。あのとき、リベリア行きを選んでいたら、今は全く違った人生を歩んでいたでしょう。

世界銀行での初仕事はどんな内容でしたか。

初仕事は、アフリカでした。世界銀行に入ってすぐに、エチオピアとジブチに飛ばされました。初めての出張ですから、たいしたことができるわけではなく、見習いのような状態です。現地で世界銀行のプロジェクトの進捗状況を確認して、レポートを作成して上司に提出しました。

実はこの最初の出張で、エチオピアでもジブチでも体調を崩し、ホテルで何日も寝込んでしまったのです。ジブ

都市復興プロジェクトで訪問したアフリカのエリトリアにて（1995年頃）

チではかなりの高熱が出たため、マラリアかもしれないので病院に行くようにと言われました。現地の病院に行くと、熱を測る際に近代的な体温計ではなく、額にリトマス試験紙のような紙を貼り付けて、その紙の色の変化で温度を測定しているようでした。そして、この色なら37.5度くらいだから平熱だと言われたのです（このとき初めてアフリカ人の平熱は高いというのを知りました）。僕は、ホテルで自分の最新式体温計で測ったときは39度もあったと言い張りました。仮にその紙の体温計が正確だとしても、自分の平熱は36度だから、37.5度でも発熱しているんだと食い下がり、薬を処方してもらいました。おかげさまで、3日ほどたって熱は下がりましたが、アフリカは手ごわいなと思いましたよ。

まもなく、スリランカに赴任されるそうですね。

1994年以来、ワシントンDC勤務でしたが、ずっと現場に行きたいと思っていました。海外出張はかなり多く、平均すれば1年の三分の一は出張しています。年間150日くらい出張していた年もありました。そんなに頻繁に途上国を訪れていても、実際に現地に住んでみたいという気持ちは変わりませんでした。でも、家族のことなど様々な条件を満たす途上国のポストを得るというチャンスには、今まで恵まれなかったのです。今回、スリランカのポストをオファーされ、スリランカも内戦等の影響で不安定な要素はありますが、子どもの教育面などで条件が比較的よかったので行くことにしました。

これまでにも、出張では何度もスリランカに行ったことがあります。インド洋に浮かぶ真珠と呼ばれるように、とても美しい島国です。スリランカは仏教徒が多いせいか、日本人の自分としては、文化的にも相通じるものがあるようで、とても好きな国のひとつです。

スリランカで僕が行うことになるのは、大体3つあります。後進地域での水道普及などのインフラ整備、そして、2004年12月に起きた津波で被災した地域の復興の総仕上げ、さらには内戦で疲弊した地域の戦後復興の仕事です。世界銀行は、緊急的な人道支援というよりも、長期的な国づくりを支援しています。スリランカでも内戦の状況を睨みながら対応していきますが、紛争の悪化などがあれば、戦後復興プログラムの軌道修正を余儀なくさせられるかもしれません。そうならないことを願っています。

ブータンのパロで担当していた水道プロジェクトの浄水施設の竣工式。ブータンの担当大臣や知事らと共に。（2005年頃）

そんな風に考えるとは思わなかった

いろいろな国に出張したり、いろいろな国の人と仕事をしたりしていると、おもしろい考え方と出会うことがあります。

いつのことだったか忘れましたが、みかんか何か果物を買おうとしていました。例えば、ひとつ100円だとします。3つ買うと300円ですよね。日本では、3つ買うから280円にまけてくれという交渉が普通ですよね。でも、ある国では、3つ買うのだったら、350円払ってくれというのです。3つも買えるのは裕福な証拠だからという論理です。そんな風に考えるとは思いませんでしたが、おもしろい考え方ですね。

アメリカに住んで10年以上になりますが、アメリカでもいろいろ考えさせられることが多いです。

この度、スリランカに赴任することになりましたので、ワシントンDCの自宅を貸すことにし、貸家の広告を出しました。アメリカでは、こういった広告を出すときに注意しなければならないことがあります。日本人の家族に借りてもらいたいから「日本人募集」としたり、野郎ばかりは嫌だから「女性限定」としたりすると、こういう表記は人種差別や性差別として訴えられるでしょう。まあ、それくらいは理解していましたが、「駅から徒歩5分」という表現もだめだと聞いて唖然としました。「徒歩何分」という表現は、車椅子の利用者や歩けない人に対する差別になるそうです。この場合は、「駅から何ブロック」とか「駅から何メートル」等の表現に置き換える必要があるのだそうです。

さて、我が家を借りたいと応募してきたのは、意外なことに、家族ではなく若者のグループが大半でした。20組くらいの応募があったのですが、そのうち家族は2組だけで、残りは若者のグループでした。アメリカ人は、アパートよりも一軒家を好むようで、家をシェアしてもいいから広々とした家に

住みたいと思う人が多いようです。日本人はプライバシー重視で、狭くてもいいから、ひとりでアパートに住みたいと思う人が多いような気がします。アメリカ人にとっては、プライバシーよりもスペースの方が重要なのかもしれません。毎週末、４～５組が我が家の見学に訪れ、結局、男性３名、女性１名合計４名の若者のグループに貸すことにしました。

怖かった状況の数々

バングラデシュに出張したとき、乗っていたフェリーが川の真ん中で座礁したことがありました。レスキューが来るまでは、本当に怖くて、まるでタイタニック体験のようでした。パキスタンでは、カラチからドバイへ行く飛行機の中で爆弾騒ぎに遭いました。乗客が全員着席し、離陸の準備が整ったそのとき、近くに座っていた男が突然席を立ち、すーっと飛行機を降りてしまったのです。爆弾を仕掛けていったのではないかと機内は騒然となり、不審物のチェックが始まりました。結局、飛行機は2時間遅れで出発しましたが、無事にドバイに着陸するまで本当に恐ろしい思いをしました。いまだになぜあの男が飛行機から出て行ったのかわかりませんね。

同じくパキスタンで誘拐されそうになったこともありました。カラチのマリオットホテルに宿泊することになっていたのですが、空港を出ると男が待っていて、「マリオットからあなたを迎えに来た」と言って近づいて来ました。てっきり、本当にホテルからの迎えの人だと思い、ついて行ったところ、行き先がどうも怪しく、どんどん暗い方へ進んで行くのです。やがて、こっちだと言って、暗がりへ引っ張り込まれそうになりました。しまった、偽者だったんだと気づき、必死で逃げました。怖くて、後ろを振り返ることもできませんでした。ただ、この時のフライトでは、トラブルのためにスーツケースが出てこなかったので、ショルダーバッグ一つしか持っておらず、すぐに走って逃げられたのは不幸中の幸いでした。スーツケースを持っていたら、あれほど迅速には動けなかったでしょう。

走って空港に戻ると、本物のマリオットホテルの出迎えの人が待っていました。今なら、あのような状況に対し、直感的に何かおかしいと感じると思うのですが、あの時は初めてのパキスタン訪問だったこともあって、まんまと騙されてしまったのです。今でも自分にとって初めての国を訪問するときは緊張します。

国際交流事業の既参加青年やこれから参加を検討している若者へメッセージをお願いします。

僕の現在の職場では、国籍や文化の違うさまざまな専門家がチームを組んで仕事をしています。バックグラウンドが異なるため、実にいろんな視点や考え方があります。そういう異なる意見をぶつけながら、時には譲歩し、時には相手を説得して、ひとつの成果を出していきます。異なる文化や異なる考え方の人たちと一緒になって、共通の目的のために努力する。このような仕事の進め方は、国際機関だけでなく、これからの地球時代にはいろいろな場で必要になってくることでしょう。日本人も自分たちの能力を活かして、こうした「共同作業」の場所にどんどん出て行かなければならないと思います。文化や背景の違う人々と一緒にひとつの物事を作り上げるというのは、一種のスキルです。こうしたスキルを身に付けるためにも、内閣府の国際交流事業への参加を一つのきっかけにし、これからの地球を共に担う人材へと飛躍してもらいたいと思います。

インタビューを終えて

2年前から取材候補者として複数の方から推薦があったものの、海外勤務だということもあり、お話を伺う機会に恵まれませんでした。ようやく実現することになり、喜び勇んで取材準備を始めましたが、ウェブサイトにある膨大な量の情報にびっくり。国際機関勤務のエリートを取材するのかと、やや緊張気味で出かけていきましたが、慶長さんのさわやかでざっくばらんなお話ぶりにほっとさせられました。慶長さんのブログには、出張された国に咲いていた花の写真が載っていて、慶長さんの細やかさや優しさを垣間見たような気がしました。

慶長寿彰さんの略歴
（青森県八戸市出身、ホームページはhttp://www.keicho.com/）

- 1986年　東京大学工学部都市工学科卒業
- 1988年　東京大学大学院を経て八戸市役所に就職
- 1991年　第18回「東南アジア青年の船」事業参加
- 1992年　八戸市役所を退職し、オクラホマ大学大学院へ
- 1994年　ワシントンDCの世界銀行本部に赴任
- 2001年　豪州ブリスベン市役所へ出向
- 2002年　世界銀行本部へ復帰
- 2007年　世界銀行コロンボ事務所に転勤

タイにおける既参加青年の事後活動

For Hopeful Children Project 2007

内閣府青年国際交流事業事後活動充実強化のための事後活動組織代表者等の派遣の１つとして、白鳥正信事務局次長、本田温子事務局次長、市川八千代国際担当幹事が、タイに派遣されました。一行は、タイ「東南アジア青年の船」事業事後活動組織（ASSEAY）の活動に参加し、事後活動についての意見交換と、共同で取り組む活動について協議するため、「フォー・ホープフル・チルドレン・プロジェクト(FHCP)」にも参加しました。

FHCPは、「東南アジア青年の船」事業既参加青年で、ASSEAY参与のウィシット・デッカムトーン氏を中心に始められ、障害を持った子どもたちや孤児などが、自信を持って育ち、競争社会において、しっかりと成長することを目的として行われている事業で、今年で17回目を迎えます。

日付	内容
3/23（金）	ボランティアスタッフバンコク集合、ラヨーン県へ移動、ラヨーン市内にてPR活動、ラヨーン海軍キャンプへ移動、スタッフ･ミーティング
3/24（土）	参加者到着、開会式、安全ガイダンス、海水浴、スポーツ活動、国王80歳記念人文字作成、子どもたちによるパフォーマンス、スタッフ･ミーティング
3/25（日）	お布施体験、僧侶による講話、海岸でのボランティア活動、関係団体主催の自主活動（日本文化紹介：折り紙）、アドベンチャー活動、テンプル･フェスティバル、子どもたちによるパフォーマンス、ボランティア・エクスチェンジ・フォーラム、スタッフ･ミーティング
3/26（月）	閉会式、後援者への謝辞、スタッフ･ミーティング

フォー･ホープフル･チルドレン・プロジェクト(FHCP)を実施するファンド・フォー・フレンズ(FFF)の代表ウィシット氏は、このプロジェクトを1.子供、2.組織、3.青少年ボランティア、4.地域社会の4つの育成プログラムと位置づけ、様々な人・団体との連携及び協力体制作りを重視しています。FHCP参加対象者は「希望にあふれた子どもたち」ですが、このプロジェクトにかかわる若いボランティア実行委員メンバーの青少年健全育成の面でも非常に高い成果を上げており、事後活動の理想的な事例と言えるでしょう。

今後、IYEOとタイ及び各国の事後活動組織と連携して、さらにFHCPに協力できる体制を作っていきたいと考え、IYEOの活動を通じ、次回FHCP（平成20年3月予定)のサポート体制作りを検討しています。

問い合わせ：sseayp@iyeo.or.jp

開会式

僧侶の講話の後、お布施をする子どもたち

海軍兵に守られスタッフと海水浴をする子どもたち

日本文化(折り紙)を体験する聴覚障害児

近畿ブロック大会(京都府)

今年度の近畿ブロック大会は、歴史と文化、観光の街「京都府　嵯峨野」での開催です。
古都の文化にふれながら、世代や事業を超えた仲間と交流しませんか？

日　付：8月18日(土)～19日(日)
場　所：京都市右京区嵯峨天竜寺広道町　コミュニティ嵯峨野
アクセス：JR嵯峨野・山陰線 嵯峨嵐山駅下車 徒歩1分(JR京都駅乗換え)
京福電鉄嵐山線 嵯峨駅前下車 徒歩3分
プログラム(予定)：

1日目：
- 国際理解ワークショップ
  講師：特定非営利活動法人京都海外協力協会(KOCA)よりお招きします
- 近畿ブロック合同19年度事業参加者壮行会
- 懇親会

2日目：
- 帰国報告会
- オプショナルツアー

お問い合わせ：京都IYEO　kyoto@iyeo.or.jp
詳しくは京都IYEOのホームページをご覧ください。随時更新中！
http://kyotoiyeo.nobody.jp/

関東ブロック大会(埼玉県)

日　付：10月13日(土)～14日(日)
場　所：大宮国体記念会館
さいたま市大宮区寿能町1-4　TEL: 048-643-1515　FAX: 048-644-3721
アクセス：東武野田線大宮公園駅より徒歩3分
JR大宮駅東口よりタクシーで10分
＊マクロコズム2007年5月号(vol.76)p.21でお知らせした「平成19年度青少年国際交流を考える集い(ブロック大会)」の会場が変更になりました。

「第7回青年の船33周年の集い」

日　　時：平成19年11月10日(土)～11日(日)
場　　所：博多サンヒルズホテル
〒812-0046 福岡市博多区吉塚本町13-55　TEL：0800-100-1176
会　　費：¥16,000
申込締切：9月28日(金)まで
連 絡 先：実行委員長　杉村　典子（6班）　TEL：0944-63-2666
事　務　局　野見山陽一（2班）　TEL：093-631-8602
8月上旬に案内状が届きます。お申し込みをお待ちしています！

平成19年度「東南アジア青年の船」事業(第34回)
日本・ASEANユースリーダーズサミット　参加者募集

「東南アジア青年の船」事業は、昭和49年のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール及びタイ各国と日本との首脳会談による共同声明に基づき、ASEAN諸国とわが国による青年国際交流の共同事業として発足したものです。昭和60年度からはブルネイ・ダルサラーム、平成8年度からはベトナム、平成10年度からはラオス、ミャンマー、平成12年度からはカンボジアを迎え、これらASEAN諸国の協力のもと、日本政府が実施しています。

フィリピン参加青年による文化紹介・パフォーマンス

日本参加青年による文化紹介・展示

第34回を迎える今年、10月22日からの日本国内プログラムの一環として、日本・ASEANユースリーダーズサミットが行われます。このサミットへの参加者を募集中です。「東南アジア青年の船」事業の参加青年と意見交換や文化交流を深め、日本とASEANの将来の青年リーダーを育成する場ですので、ASEANに興味のある方や各国代表との文化交流やディスカッションを通じてASEANや日本についてより深く知りたい方はふるってご応募ください。

目 的

日本・ASEANユースリーダーズサミットは、日本とASEAN各国及びASEAN各国相互の連携を強化するために、より多くの青年が日本とASEAN諸国を結ぶネットワークに参加することを目的として、駐日ASEAN各国大使館及び東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター（日本アセアンセンター）と連携し、ディスカッション及び文化交流を中心に行う合宿型プログラムです。

文化交流を通じてお互いの文化を体感した後に、身近な内容でのディスカッションを行うことで、相互理解を深め、今後にもつながるコミュニケーションを図ります。

文化交流には、ASEAN設立40周年を迎える今年、駐日ASEAN各国大使館及び日本アセアンセンターのご協力を頂くことになっております。

ディスカッションについては、「東南アジア青年の船」事業のディスカッションと連携しているため、共通テーマ及びグループテーマは同じものにしています。

ディスカッション活動（ボランティア・グループ）

ディスカッション活動（ボランティア・グループ）

概 要

【主 催】：内閣府

【協 力】：駐日ブルネイ・ダルサラーム国大使館
駐日カンボジア王国大使館
駐日インドネシア共和国大使館
駐日ラオス人民民主共和国大使館
駐日マレーシア大使館
駐日ミャンマー連邦大使館
駐日フィリピン共和国大使館
駐日シンガポール共和国大使館
駐日タイ王国大使館
駐日ベトナム社会主義共和国大使館
東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター
（日本アセアンセンター）

日程	プログラム（予定）
10月27日（土）	日本側参加者事前研修
10月28日（日）	日本側参加者事前研修 「東南アジア青年の船」事業参加者入所 全体オリエンテーション ディスカッション・グループ別ミーティング
10月29日（月）	午前：「日本・ASEAN 文化交流プログラム」準備 午後：「日本・ASEAN 文化交流プログラム」オープニング 各国紹介パフォーマンス 各国紹介展示 夕方：交流の夕べ
10月30日（火）	午前：ディスカッション・セッション 午後：ディスカッション・セッションのまとめと展示・発表準備 フェアウェル・パーティ（グループ発表、メッセージ発表、ディスカッション成果の展示含む）

＊写真はすべて平成18年度第33回「東南アジア青年の船」事業中のものです。

【 会 場 】国立オリンピック記念青少年総合センター
（東京都渋谷区代々木）

【対 象 者】全日程に参加できる18歳から概ね30歳まで
（高校生不可）（平成19年10月1日現在）

【募集人数】100名

【参 加 費】無料（期間中の食費・宿泊費は無料。
但し、会場までの交通費は自己負担）

【ディスカッションの共通テーマ】
青年の社会参加

【ディスカッション・グループ】（8テーマから1つを選択）
異文化理解、環境、インフォメーション、国際関係、学校教育、伝統文化、ボランティア、青少年育成

応募の際は、下記書類を（財）青少年国際交流推進センター事務局まで提出してください。

（1）申込書：下記URLからダウンロードできます。
郵送ご希望の方は下記まで御連絡ください。

（2）作文：
ア）英作文：志望動機（600 ～ 800 words）
イ）和作文：選択したディスカッション・グループのテーマに関し、注目していることについての自分の意見（1000字程度）

【締め切り】平成19年8月31日（金）消印有効

【提出先及び問い合わせ先】
（財）青少年国際交流推進センター
担当：軽込（かるこめ）、山本
TEL：03-3249-0767
FAX：03-3639-2436
E-mail：yls2007-ly@iyeo.or.jp
URL：http://www.centerye.org

※「東南アジア青年の船」事業既参加青年の方は、スタッフとしてご協力ください。

ドミニカ共和国派遣団OBによるドミニカ共和国大使館表敬訪問

「航空機による青年海外派遣」事業の事後活動充実強化の一環として、5月30日、在東京ドミニカ共和国大使館サンチェス公使参事官への表敬訪問が行われました。まず、内閣府平井補佐、日本青年国際交流機構（IYEO）大橋副会長より御挨拶申し上げ、次いで平成17年度ドミニカ共和国派遣団金子団長及び、平成10年度ドミニカ共和国派遣団団員堀さんが、3月にドミニカ共和国で行われた同国青年省との協議、同国側既参加青年との会合、また4月21日に東京で行われたAir-Net Dayでの日本側既参加青年が考えた今後の活動案について報告しました。

会談は終始和やかな雰囲気で進み、ドミニカ共和国と日本の友好促進のためにいっそう協力し合うことが話し合われました。

「第四回日韓交流連絡会議」開催のお知らせ

今年度も日韓交流連絡会議を下記のとおり開催する運びとなりました。今年度のテーマは「ともに行こう！僕らのきずな、ホップ、ステップ、ジャンプ！」。これまで築いてきた日韓交流の幅を広げる年にしませんか？

具体的なプログラム、参加者の募集は日韓交流連絡会議ホームページ、ならびに韓国OB会メーリングリスト上で発表する予定です。

たくさんの韓国派遣団OB・OGの皆様にまたお会いできることを楽しみにしています。

昨年は映画村を見学するなど野外プログラムも実施しました

互いの未来について語り合ったワークショップ「未来連鎖」

と　き：8月24日(金)～26日(日)（2泊3日）

ところ：韓国ソウル市、もしくは近郊

※詳しくは、本事業のホームページをご覧ください。

http://www.iyeo.or.jp/korea/renraku/

お問い合わせ：日韓交流連絡会議事務局

korea_kaigi@iyeo.or.jp

「グローバル・フォト・コンテスト」

第3回グローバル・フォト・コンテストの入賞作品31点が決定しました。

最優秀賞：「Smiles of Hope」
Fabricio Borges Carrijo
（第18回「世界青年の船」事業（ブラジル））

日本青年国際交流機構(IYEO)会長賞：「かくれんぼ」
平山 雄大（平成18年度カンボジア派遣団）

(財)青少年国際交流推進センター理事長賞：
「It's Fun to Swing with Grandma!」
Genevieve Yap-Gono
（第22回「東南アジア青年の船」事業（フィリピン））

近日中に入賞作品をホームページ上でご紹介しますので、どうぞお楽しみに！ www.swyaa.org/photo

また、グローバル・フォト・プロジェクトチームでは写真パネルの貸し出しを行っています。

①第1回（2004）「食のある風景」
②第2回（2005）「ストリート・マーケット」
③第3回（2006）「微笑みと笑い」

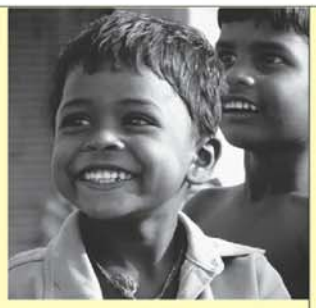
ご希望のパネルの種類（①～③）、担当者名、担当者連絡先、使用するイベント名、使用期間、送付先を(財)青少年国際交流推進センター（TEL 03-3249-0767）へお知らせください。

フォト・パネルは各都道府県のIYEOイベントのみならず、海外でも活用されています。バーレーンでは、昨年末に開かれた「世界青年の船」事業ボランティア・リユニオン期間中にパネル写真の紹介をしました。カナダでは、大学構内で展示会が開かれ、また、コスタリカの展示会では、一般の方々にも見ていただきました。

グローバル・フォト・コンテストの運営・広報・写真の応募・投票・そして展示会の開催等には、さまざまな形で会員がかかわっています。第4回（SWY20周年記念事業）のコンテストの開催も決定されました。引き続き、御支援・御協力をお願いします。

グローバル・フォト・コンテストプロジェクトチーム

今月号の表紙



第3回グローバル・フォト・コンテスト最優秀賞
タイトル：Smiles of Hope
撮影者：
Fabricio Borges Carrijo
（ブラジル、SWY18）
撮影場所：インド

虐げられ、ひどい状況にあっても、微笑もうとする人間の力に希望を見出す。これまでに滞在したことのある悲惨な土地でも、希望や団結力を見出してきた。子どもたちの目には、虐げられても決して奪われることのない輝きや威厳がある。

編集後記

第3回「グローバル・フォト・コンテスト」の入賞作品が発表されました。どの写真も生き生きとしていて、見ている者に今にも話しかけてきそうな迫力がありました。これから数回にわたって、美しい写真の数々がマクロコズムの表紙を飾ります。どうぞお楽しみに！（ふ）

MACROCOSM 7月号 vol.77

2007年7月1日発行（隔月発行）
編　集　マクロコズム編集委員会
発　行　(財) 青少年国際交流推進センター
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階
TEL: 03-3249-0767　FAX: 03-3639-2436
e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp
URL: http://www.centerye.org (CENTERYE)
http://www.iyeo.or.jp (IYEO)
編集協力　内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構（IYEO）
定　価　220円（210円）
印刷所　株式会社デックス
TEL: 03-3400-8089　FAX: 03-5469-5270

客船という劇場では、
私たちが名脇役を演じることで、
主役であるお客さまが輝きます。
にっぽん丸　フロントパーサー　髙橋　貴香

since 1884 Pioneer Of Cruise

Do Cruise 2007 日覚めれば、新しい街。 http://cruise2007.jp

「クルーズイヤー2007」の公式スポンサーとしてクルーズを盛りあげるイベント・キャンペーンに協賛しています。

MOPAS にっぽん丸

低気圧の影響で、今夜は少し揺れるかもしれない…。そんなブリッジからの船内放送が終わった途端、フロントの電話が音をたてて鳴り始めた。受話器をとったのはフロントパーサー髙橋貴香。乗船6年目になるフロントのリーダー的存在だ。長い会話を「心配ございません」という明るい口調で締めくくり受話器を置いた髙橋は「今夜は揺れる…なんて聞いたら、初めて乗船されたお客さまは、気が気じゃありませんよね」と言って微笑んだ。フロントパーサーはお客さまにとって、あらゆる問題解決の窓口となる。その意味で彼女たちの存在は、にっぽん丸の印象を決める重要な配役だ。だからこそフロントパーサーがシナリオ通りの接客に終始していては客船としての“格”は生まれない。「にっぽん丸のフロントパーサーに求められるものは、迅速かつ的確な判断力はもちろんのこと、アドリブを駆使してお客さまに安心感をお届けできる対応能力なのです」と髙橋は言う。冷静沈着そして女性ならではの細やかな心配りが肝心なのだと。「私たちは名脇役を演じなくてはならないのです。にっぽん丸という劇場で、主役であるお客さまが輝けるよう自分を常に磨いておかなくてはなりません。どのようなシーンでも、またどのようなお客さまでも即座に対応できるチカラがなくては」と話す髙橋。そうしたそばから、新たなテレフォンコールが…またまた彼女の出番のようだ。

NIPPON MARU

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

横浜／小樽クルーズ 横浜発 小樽着
横浜→小樽
2007年8月27日（月）～8月29日（水） 66,000円

初秋のサハリンクルーズ 小樽発着
小樽→コルサコフ→小樽
2007年9月11日（火）～9月13日（木） 83,000円

秋の味覚 釧路・大船渡クルーズ 横浜発着
横浜→大船渡→釧路→横浜
2007年9月18日（火）～9月22日（土） 159,000円

飛んでクルーズ北海道。 小樽発着
小樽→利尻島→網走→礼文島→小樽（5日間×3航海）
2007年8月29日（水）、9月2日（日）、9月6日（木）発 128,000円

小樽／横浜クルーズ 小樽発 横浜着
小樽→横浜
2007年9月13日（木）～9月15日（土） 66,000円

2008年世界一周クルーズ 横浜・神戸発着
横浜・神戸発着（各101日間）海外17カ国24港
2008年4月7日（月）～7月17日（木） 2,980,000円

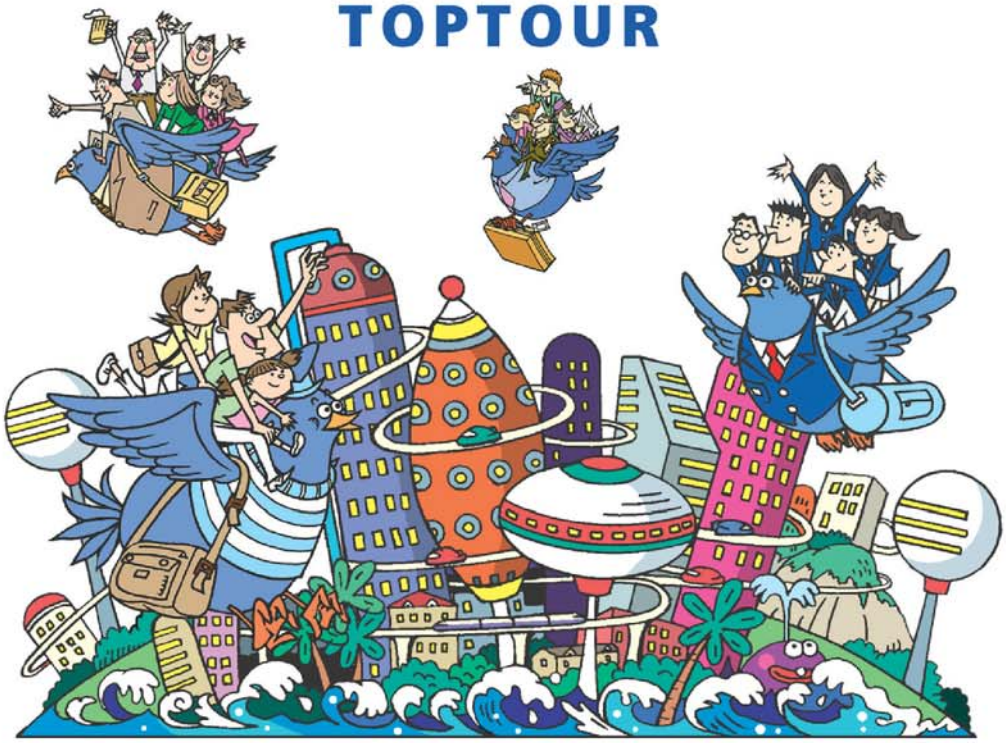
そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様（全食事・イベント付）の旅行代金です。※：各種のコースがございます。

商船三井客船
MOPASは商船三井客船の愛称です。 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル5F

お問合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。
クルーズデスクフリーダイヤル 0120-791-211 http://www.mopas.co.jp

The 50th Anniversary
2006年1月31日
50

TOPTOUR



東急観光株式会社は創立50周年を機にトップツアー株式会社として生まれ変わりました。

旅は人と人とのコミュニケーションの架け橋
旅は人と自然が触れ合う地球の扉
旅は人と歴史をつなぐ時空間のトンネル
そんな旅を創造し、提案する［旅行インテリジェンス企業］
それがトップツアー株式会社

東急観光は50年にわたる第一幕からトップツアーとして新たな第二幕のステージに立ちました。
みなさまから愛される企業をめざして・・・・・・・

東急観光が社名を変えました。
トップツアー株式会社
TOPTOUR
国土交通大臣登録旅行業第38号 © 日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号 http://www.toptour.co.jp http://toptour.jp

人が行き、人が集う、それが旅。

マクロコズム 2007年1月号 通巻七七号隔月発行 定価二二〇円（本体二一〇円）編集協力：内閣府政策統括官（共生社会政策担当）日本青年国際交流機構